



# からしだね

2020年2月号  
(557号)

キリストの受難 カトリック池田教会

主任：ノノイ・プラザ神父

住所：〒563-0041 池田市満寿美町9-26

TEL：072-751-2400 FAX：072-753-4624

URL(ホームページ)：<http://catholic-ikeda.sakura.ne.jp/church/index.htm>



## 本号の記事の主題など

教皇様の説教—教皇ミサ(東京)、11月25日  
新成人おめでとうございます  
ドレミの会は餅つきで新年をスタート  
支援先紹介 最終回  
キリスト降誕セットが新調されました

南アフリカから届いた子供たちの写真  
みんなの談話室(2編)  
中動態“Let it be”とエコロジカル・ライフ  
創設期の池田教会で洗礼の恵みを受けて  
年間カレンダーに追加・変更された行事予定

## 教皇フランシスコの説教

教皇(東京)ミサ、2019年11月25日



今聞いた福音は、イエスの最初の長い説教の一節です。「山上の説教」と呼ばれているもので、わたしたちが歩むよう招かれている道の美しさを説いています。聖書によれば、山は、神がご自身を明かされ、ご自身を知らしめる場所です。神はモーセに、「わたしのもとへ登りなさい」(出エジプト24・1参照)と仰せになりました。その山頂には、主義主義によっても、「出世主義」によっても到達できません。分かれ道において師なるかたに、注意深く、忍耐をもって丁寧に聞くことによるのみ、山頂に到達できるのです。山頂は平らになり、周囲がすべて見渡せるようになり、そこはたえず新たな展望を、御父のいつくしみを中心とする展望を与えてくれるのです。イエスにこそ、人間とは何かの極みがあり、わたしたちの考えをことごとく凌駕する充満に至る道が示されています。イエスにおいて、神に愛されている子どもの自由を味わう新しいのちを見いだすのです。

しかし、わたしたちはこの道において、子としての自由が窒息し弱まる時があることを知っています。それは、不安と競争心という悪循環に陥るときです。息も切れるほど熱狂的に生産性と消費を追い求めることに、自分の関心や全エネルギーを注

ぐときです。まるでそれが、自分の選択の評価と判断の、また自分は何者か、自分の価値はどれほどかを定めるための、唯一の基準であるかのようにです。そのような判断基準は、大切なことに対して徐々にわたしたちを無関心、無感覚にし、心を表面的ではないことがらへと向かうよう押しやるのです。何でも生産でき、すべてを支配でき、すべてを操れると思ひ込む熱狂が、どれほど心を抑圧し、縛りつけることでしょう。

ここ日本は、経済的には高度に発展した社会です。今朝の青年との集いで、社会的に孤立している人が少なくないこと、いのちの意味が分からず、自分の存在の意味を見いだせず、社会の隅にいる人が、決して少なくないことに気づかされました。家庭、学校、共同体は、一人ひとりが支え合い、また、他者を支える場であるべきなのに、利益と効率を追い求める過剰な競争によって、ますます損なわれています。多くの人々が、当惑し不安を感じています。過剰な要求や、平和と安定を奪う数々の不安によって打ちのめされているのです。

カづける香油のごとく、主のことばが鳴り響きます。思い煩うことなく、信頼しなさい、と。主は三度にわたって繰り返して仰せになります。自分のいのちのことで思い悩むな、……明日のことまで思い悩むな(マタイ6・25、31、34参照)。これは、周りで起きていることに関心をもつなといっているのでも、自分の務めや日々の責任に対していい加減でいなさいといっているのでもありません。それよりも、意味のあるより広い展望に心を開くことを優先して、そこに主と同じ方向に目を向けるための余地を作りなさいという励ましなのです。「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる」(マタイ6・33)。

主は、食料や衣服といった必需品が大切でないとおっしゃっているではありません。それよりも、わたしたちの日々の選択について振り返るよう招いておられるのです。何としてでも成功を、しかもいのちをかけてまで成功を追求することにとらわれ、孤立してしまわないようにです。世俗の姿勢はこの世での己の利益や利潤のみを追い求めます。利己主義は個人の幸せを主張しますが、実は、巧妙に

わたしたちを不幸にし、奴隷にします。そのうえ、真に調和のある人間的な社会の発展をはばむのです。

孤立し、閉ざされ、息ができずにいるわたしに抗しうるものは、分かち合い、祝い合い、交わるわたしたち、これしかありません(「一般謁見講話(2019年2月13日)」参照)。主のこの招きは、わたしたちに次のことを思い出させてくれます。「必要なのは、『わたしたちの現実は与えられたものであり、この自由さえも恵みとして受け取ったものだということ、歓喜のうちに認めることです。それは今日の、自分のものは自力で獲得するとか、自らの発意と自由意志の結果だと思ひ込む世界では難しいことです』」(使徒的勧告『喜びに喜べ』55)。それゆえ、第一朗読において、聖書はわたしたちに思い起こさせます。いのちと美に満ちているこの世界は、何よりも、わたしたちに先立って存在される創造主からのすばらしい贈り物であることを。「神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ、それはきわめてよかった」(創世記1:31)。与えられた美と善は、それを分かち合い、他者に差し出すためのものです。わたしたちはこの世界の主人でも所有者でもなく、あの創造的な夢にあずかる者なのです。「わたしたちが、自分たち自身のいのちを真に気遣い、自然とのかかわりをも真に気遣うことは、友愛、正義、他者への誠実と不可分の関係にある」(回勅『ラウダート・シ』70)のです。

この現実を前に、キリスト者の共同体として、わたしたちは、すべてのいのちを守り、あかしするよう招かれています。知恵と勇気をもって、無償性と思いやり、寛大さとすなおに耳を傾ける姿勢、それらに

特徴づけられるあかしです。それは、実際に目前にあるいのちを、抱擁し、受け入れる態度です。「そこにあるもろさ、さもしさをそっくりそのまま、そして少なからず見られる、矛盾やくだらなさをもすべてそのまま」(「ワールドユースデーパナマ大会の前晩の祈りでの講話(2019年1月26日)」)引き受けるのです。わたしたちは、この教えを推し進める共同体となるよう招かれています。つまり、「完全でもなく、純粋でも洗練されていなくても、愛をかけるに値しないと思ったとしても、まるごとすべてを受け入れるのです。障害をもつ人や弱い人は、愛するに値しないのですか。よそから来た人、間違いを犯した人、病気の人、牢にいる人は、愛するに値しないのですか。イエスは、重い皮膚病の人、目の見えない人、からだの不自由な人を抱きしめました。ファリサイ派の人や罪人をその腕で包んでくださいました。十字架にかけられた盗人すらも腕に抱き、ご自分を十字架刑に処した人々さえもゆるされたのです」(同)。

いのちの福音を告げるということは、共同体としてわたしたちを駆け立て、わたしたちに強く求めます。それは、傷のいやしと、和解とゆるしの道を、つねに差し出す準備のある、野戦病院となることです。キリスト者にとって、個々の人や状況を判断する唯一有効な基準は、神がご自分のすべての子どもたちに示しておられる、いつくしみという基準です。

善意あるすべての人と、また、異なる宗教を信じる人々と、絶えざる協力と対話を重ねつつ、主に結ばれるならば、わたしたちは、すべてのいのちを、よりいっそう守り世話する、社会の預言的パン種になれるでしょう。

## 新成人おめでとうございます

本年は、10名が新成人を迎え“新年のミサ”にて、ノイ神父から1日に6名・2日に1名が祝福を受けました。それぞれに、今の様子や将来の事を述べてもらい、とてもユニークでかつ个性的で予想外のコメントが飛び出し、聖堂内がどよめく場面もあつたりしました。新成人の門出にふさわしく、熱気ある新年のミサでした。

## ドレミの会は餅つきで新年をスタート

福音宣教委員会の新年行事はドレミの会の餅つきです。新年の第2土曜日の昼前から蒸し始めたもち米を、石臼と杵を用いて本格的に代わる代わりで餅をつき始め、午後2時近くまで続けました。

50名を超える人々がカール記念館1階の玄関ホールと多目的ホールで新年のあいさつもそこそこにして、突き立ての餅を丸餅にして、中皿に小豆餡、黄な粉、大根おろし、などなどを思い思いに選んで、食べながら新年の抱負を語り合いました。

満腹になれば、寒さも忘れて体操の先生の音頭で全身体操やダンスに興じて、皆さん爽快な一日でした。



## 支援先紹介 最終回

### RASA-Japan

RASA-Japanは、「Rural (田舎の)」と「Asia (アジア)」、「Solidarity (結束、連帯)」、「Association (団体)」の日本支部を意味しています。

RASA-Japanは、フィリピンの子ども達を貧困の連鎖から救うための活動を行っています。

貧困地域には、学校が足りません。学ぶための基盤がないのです。貧困家庭は貧しすぎて、最低限度の食事すらできない子供たちがいます。そして子供は重要な働き手です。学校に行かせると収入が減り生活ができません。収入が確保されない限り、学校があつても行けないのです。

この「教育・食事・収入」を支援することで、貧困の連鎖を断ち切ることができると考え、そのために、学びの場を作り、食事を提供し、生活の再建を支援する活動をしています。

### コムニタスの家

コムニタスの家は、大阪大司教区の資金援助を受けて設立された福祉施設です。障がいを持っていても、受け身の立場ではなく、適切な介護を受け、互いに助け合い、地域社会の中で「自立生活を営む家」を目標に設立されました。現在は、障害者自立支援法に基づく“共同生活援助介護サービス包括型”の施設に位置づけられています。

池田教会の皆さまが、いつも支援のための活動にご協力くださることに感謝しております。支援先団体のニュースレターをカール記念館1階のラックに置いてありますので、ご興味のある方はご覧ください。  
社会活動委員会

2月のガラスケースのことば  
貧しい人々は幸いである、  
神の国はあなたがたのものである  
ルカ 6・20

## 教会のキリスト降誕セットが 新調されました

昨年(2019年)の12月12日に掲示板内に収まるキリスト降誕セットが、H.T.さんのお宅で眠っていた人形たちとM.Y.さんの紙製の馬小屋、K.K.さんの布製の背景で作られました(下図)。従来のほぼ全陶磁器製の降誕セット(右図)は聖堂の祭壇上に移されました。

併せて、鉢植えの樅ノ木(2株)が聖堂の洗礼場(下図右)と祭壇(馬小屋の後方)に置かれました。

右の2葉の写真はR.Y.さんから提供されました。



三代目(?)の樅ノ木がすくすくと育ちますように！

## 南アフリカから届いた子供たちの写真

お世話になっております。南アフリカのセント・フランシス・ケアセンターから、皆様のご寄付で購入したガウンや遊具の写真がとどきました。子どもたちはさっそくそのガウンで(ケア・センターの)卒業式に臨んだようです。皆様の温かいご支援がこのような形で生かされましたことを報告させていただきます。

本当にありがとうございました。

久保



みんなの談話室

中動態“Let it be”とエコロジカル・ライフ

大野

待降節が始まる6日前、11月24日、カトリック箕面教会の矢野吉久神父様をお迎えして黙想会が開かれた。その第2講話のテーマは乙女マリアへのお言葉「生きよ！マリア」であった。大天使ガブリエルから「受胎告知」を受けたときのヨセフとの婚姻前のマリアは12歳か13歳だから、「わたしは主のはしためです。お言葉通り、この身に成りますように」（英語表現“Let it be”）と応えました。それからのマリアの馬小屋での出産、エジプトへの難民としての生活、公現以降のイエスに就き従う日々、エルサレムでの捕縛、十字架上の刑死による我が子との別れ、など艱難辛苦の体験は想像を絶する。フランシスコ教皇様は使徒的勧告「福音の喜び」の最終章で聖母を「心を剣で刺しぬかれた方」と書いているように苦しみながら「生きよ！マリア」と励ます神さまに忠実に生きる生き方の先駆けとなられた。

古代に大天使とマリアとの間で交わされた対話は、現代においてはここに傷を持つ者（クライアント）が聞き手に専念できる治療者に遭遇するなら、クライアントは治療者との分かち合いの対話で傷から回復するきっかけを見つけ、抑制的な治療者らと一緒に、回復の歩みを体験できることが報告されている<sup>2)</sup>。しかし、論理的に説得するという対話で傷ついたクライアントに自己の尊厳を回復させることはできない。自己自身の意志が明白な能動態表現と他者によって鼓舞される受動態表現とも自己の尊厳を回復させる役を果たせない時に、聞き手になった治療者との対話では、治療者らに促されたクライアントの訴えが治療者や家族に分かち合えた内容や分かち合うのに必要な時間が聞き手によって多様・多声であるのにクライアントが気づくなら、自己を相対化したり、自由を必然と感じて、自己の尊厳を回復するという。<sup>2)</sup>

このように先にも後にも進めない状況が変化するのを関与する人々に委ねて待つ状態は能動態でも、受動態でもない使役動詞（letやlassen）を用いた中動態で表され、使役動詞の目的語はその場所であり、関係する人々との交わりを通してクライアントの中に何か新しいのが生まれて、話し手に新たな自律性が生まれて、尊厳を回復すると解釈される。

私たちの生活は地球上の自然に取り囲まれており、周囲の自然は私たちが操作する単なる対象でなく、人類によって部分的に換えられたとしてもその生態圏は包み込まれた人類の生き方に甚大な影響を与えています。例えば、内陸の樹木の伐採や河川から引いた灌漑水は塩害が土地の砂漠化と飲料水の劣化や農業の壊滅を齎し、生活基盤は奪われてしまう。近年のここ日本においても、集中豪雨や太平洋沿岸を北上する大型台風は地球温暖化による気候変動がシミュレーションの域から現実態へと変貌して、わたしたちの生活基盤を根こそぎにする。

私たちはどなたでも、自転車を転倒させず走り続けることができる。自転車が走行中に右に転倒しそうになったら、単に自転車を正立させようとするだけでは自転車に乗ることができないことを知っています。つまり、私自身の重心を左に移して自転車と私の身体との全体の重心を中央に置き続け、自転車と私の身体を一体に捉えるのが欠かせないのです。

年齢を重ねるにつれて私たちは、こころの宿であり、命を支えている身体（肺・心臓・脳などの内臓や手・足・口・皮膚、それらを結ぶ血管・神経などから構成）からの感覚的な信号が、時に激烈に、時に静かに、喜びや悲しさ、辛さ、などの情感をともって訪れるのを経験する。自分の身体を自在に制御できる所有物のように見なしていたのに、他の哺乳動物種と似た身体の動きや植物に見られる季節感の変化を通して、私たちの身体感覚が数億年の前の原始的な生物の運動や生き様に連なっているのを感じたりします。私たちには己の身体の内部の動きを直接見ることができず、身体臓器からの信号に鈍感けれども、音楽やスポーツの体験を通してこころと身体が不可分であるのを感じています。前の教皇ベネディクト十六世は「身体にある尊重すべき自然本性とほいままに操ることのできない自然本性の統合は失敗しないように…。」と書くほどこころと身体との主従関係は明確ではないのです。<sup>3)</sup>

昨年9月に発刊された国分功一郎著「原子力時代の哲学」<sup>3)</sup>にはドイツの哲学者ハイデッガーの言葉“現代には計算する思惟があっても、省察する熟慮から逃げている。…（中略）…省察する熟慮は、あたかも、農夫のごとく、蒔かれて種

子が生い立ち、成熟するか否かを見守りつつ待たねばならない”があります。そのためには自己の意志に固執しないで、新たなものを受け入れられるように自らを開いて、他からの贈り物として受け取るように勧めていると読めます。

「原子力時代の哲学」の中で人類は生態圏で利用できる原子の持つエネルギー(当初「原子の火」と呼ばれた)の全体像が問われているが、地球から遠く離れた太陽で起きている核融合反応によって生じたエネルギーの一部が光となって地球に到達するので、遠距離にある地球の生態圏に届く光はそのほんの一部に過ぎません。しかし、その光は地球に識別するのに有効な明るさと色、そして、運動を起こすエネルギーを齎し、生物の誕生と進化を生み出す条件が地球表面付近に満たされました。

もう一つの核変化である重いウランなどの原子核の分裂を起こす場合には、その連鎖的な核分裂を抑制するだけでなく、核分裂産物の放射性核種を無害化するのが高いハードルになっています。その現実を知りながら、世界中に多数の核分裂用の原子炉が作られ、エネルギーの完全自給する夢が追求されてきたのです。原子の火を灯すのに成功して、原子の火が兵器としてではなく平和利用の緒に就いた60年も前に、ハイデッガーは重原子の核分裂の全体像が明らかにされていないことに警鐘を鳴らしたのです。しかし、人びとは自らを開いて核分裂の謎のすべてを受け入れようとしなかったことに気がつきませんでした。

当時の私は、太陽からの贈り物である光による緑葉植物のグルコース分子の光合成の研究に心を躍らせていた理系学生でした。その後の30年の間に、私はこころと身体との和解や人と環境との和解の意味を問うこともなく、身体と環境に合わせた光の利用法を開発するのを目指していました。職業的な研究者としての最後の10年間で、誕生後17億年経た地球の表面近くで生きる単細胞生物が太陽からの贈り物として届いた光のエネルギーを用いて6個の二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)と6個の水(H<sub>2</sub>O)からグルコース(C<sub>6</sub>H<sub>12</sub>O<sub>6</sub>)の合成に成功して、核を持つ真核細胞に変化し、世代交代がより確実になって生物進化の頻度を上げ、多細胞生物を生み、多様・複雑な生物を誕生させ、地球の生態圏も広がりました。それから28億年間の地球の歴史的な発展の実証的な物語を後付けするうちに私自身の視野も広がり、分析的

な手法に統合的な視点を加えたと思っています。

それまでの単なる解析法の開発が陥りやすい過ちに完璧に気付かせてくれたのは3年前に出版された教皇フランシスコの回勅「ラウダート・シ」<sup>4)</sup>でした。そこには、「わたしたちの四つの交わり、——内なる自然との交わり、わたしたち自身がその一部である環境との交わり、神との交わり、他者との交わり——を通して、「it」である「ともに暮らす家」である場所(地球)はそこにある様々な被造物は何か新たなものを生み、成長し、より相補的な関係性が生じる。」と中動態で著されています。これらの交わりにとって、欠かせないのは他者を理解しようとする意志ではなく、自己の開示—神へ向かっての回心や他者に向かつて自己を開いていること、にあると中動態の姿勢をとれる様になりたいものです。

待降節黙想会を指導された矢野吉久神父に感謝。

- 1)使徒的勧告「福音の喜び」 教皇フランシスコ、2014.6、カトリック中央協議会刊。
- 2)「オープンダイアログ」 J. セイックラ、T. E. アンキル著、高木俊介、岡田 愛訳、2016.3、日本評論社刊。
- 3)「原子力時代における哲学」 国分功一郎、2019.9、晶文社刊。
- 4)回勅「ラウダート・シ」第2章創造の福音(65～83)、第4章総合的なエコロジー(138～155) 教皇フランシスコ、2016.8、カトリック中央協議会刊。

## 創設期の池田教会で洗礼の恵みを受けて

シスター・ゾエ田島

2020年1月12日、主の洗礼の祝日に池田教会に来られたことを感謝します。わたしは、池田教会の最初のころのカール神父様にいろいろ教えていただいて洗礼の恵みを受けたものです。今現在は、愛徳姉妹会の会員としてシスター・ゾエ田島と申します。



この池田教会の初めのころを思い出します。私にとって池田教会は故郷です。第2次世界大戦後、なにもかもを失ってしまった後で、疎開先の石橋で居を構え、近くの小学校、豊中第一中学と豊中第三中学に入り、その後、近くの岡町にあった府立桜塚高校に入ったのですが、初めのころの

何もない頃から、デモクラシー、自由、責任ということ、それまでとは全く反対の教育を受け、先生方と生徒も大変混乱していた時代でした。ホームルームという時間が設けられ、生徒は自由に発言し、いろいろなことをしてきましたが、職員会議は大変だったと思います。

そのような今の日本では考えられないような貧しい生活の中で、長い間に亘って、私のために祈ってくれた弁護士の方の長谷川先生に出会いました。その長谷川先生は豊中教会から新しく池田教会を創立するために中心となって奔走された先生です。そして、2・3年前にアメリカからミッションによって雲雀ヶ丘に転勤されたカール神父様とマテオ神父様に出会いました。カール神父様はまだ日本語が十分でなく、それでも、「池田の市民の中で生活したい」と言われて、満寿美町の場所を探し当てられて、そこに教会を建てよう決められました。満寿美町の小さな日本家屋の一階に畳敷きの聖堂と二階に司祭室、そして、聖堂の横に信徒の集まる小さな部屋がありました。その畳敷きの部屋に細長いベンチを備えられましたが、16・7人の信者たちは畳に正座して机として祈りのご本を置いたので、アメリカ人の神父様はびっくりされました。

マテオ神父様は雲雀ヶ丘で、カール神父様は池田教会で宣教を始められました。どちらも聖なる雰囲気の中での神父様でしたが、片言混じりの日本語はとても面白いものでした。後に英知大学の元学長でいらつしゃった山田利秋先生がカテキスタとしてカール神父様と一緒にあちこち廻っておられました。その山田先生自身も雲雀ヶ丘の改札口を出たところでマテオ神父様と出会う、お話し合いを持ち、洗礼を受けました。山田先生は、京都大学の学生でしたが、私たち信徒の先輩となりました。

カール神父様と山田先生からわたしたち信徒はカテキズム、むかしの公教要理、の勉強をいたしました。わたしはそのクラスの途中から加わったのですが三位一体の玄義(秘儀)の話でした。それまで少しプロテスタント教会にも行っていたのですが、そこでは旧約の面白い話ばかりでありよく分からず、本当の神様はどこに居られるのかと思いつらしてました。その時、カトリック教会の三位一体の唯一の神様の話を聞いて、これこそ本当の神様であると思ひ至り、洗礼の恵みを受けることになりました。カール神父様のユーモアをまじえたいろいろなお話、山田先生の面白いカテキズムのお話につられて、一年間の勉強を続けました。プロテスタントの

宣教師ミス・パーサーの改宗式と私たちの洗礼式と一緒に合わせるために、ご復活を待たないで四旬節の第一主日にご洗礼を受けました。

その時もまだ小さな畳の部屋でしたが、私たちは家族的な温かい雰囲気の中で育てられ、からだねのような小さな種が撒かれて、今のよう大きな池田教会になったことを神さまの見守りのお陰と心から感謝しております。特に、御受難会のご指導とご鞭撻にこそ感謝しつつ、これからの池田教会のご発展をこそ祈ります。

カール神父様は面白いアメリカ人で、かつては敵国であつたのにとても優しく、いろいろとお話して下さい、少しキュウピーさんの様な感じで、わたしたち女子青年会は神父様のお祝い日にキュウピーさんに祭服を着せてプレゼントし、喜ばれました。貧しかった日本人を大切にしてくださっていて、米国から送られた一枚の電気毛布を日本人には手の届かない高値でしたが、バザーの一等賞の賞品として提供して下さったこともありました。

私たち青年会は一週間ごとにレジオマリエの会でカール神父様のお話を聞き、マリア様にお祈りの取次をお願いしながら、貧しい人や病気で教会に来れない人への訪問をせつせと2人一組で行っていました。私の一歳年下の亡くなった妹とその訪問を行いました。58歳で亡くなった妹は背が少し高かったので私たちは双子のように育っていて、カール神父様はいつもわたしを妹と紹介されたので恥じていました。

10歳若い妹は現在も池田教会に居り、小学生の頃に洗礼を受けました。弟は教会を車の駐車場と心得ていて、教会の中に入るのは両親の法事や祖父母の葬儀の時のみでしたが、今だに弟のためにお祈りを続けています。近所の人達も、本当の神様、唯一の神様を早く見つけられるように、苦しい時も、辛い時も、嬉しい時も、何時も、見てくださって、いつの日かみんなに永遠のいのちを与えてくださる神様に少しずつ近づけられたら良いのになあと願っています。

世の中は平和を願いながら、戦争、内乱、いろ



Fr. CARL SCHMID C.P.

いろな不都合なこと、不幸なこと、一杯あります。小さい子供が虐待されたり、食べるものがなかったり、また、独居老人や老々介護で疲れてしまうお年寄りの方々も現代では眼に見えない貧しい人びとの数に入ると思います。私たちは、これからも、喜ばしく、明るく、喜びを携えて行けるようにと訪問を続けたいと思います。

最初のころの池田教会でカール神父様とマテオ神父様は根を大きく育てて下さいました。カール神父様は本当にカテキズムと家庭訪問に力を注がれ、秘跡を信じられるように、また、日常生活上の考え方や手法についても、指導して下さいました。大恩人であるカール神父様、マテオ神父様、デニス神父様、国井神父様、松本神父様、皆さまは天に召されましたが、私たちは、その教えと導きに従って、永遠の命につながれた友達として、わたしはふるさとに帰って来ると大きな力を得て、また頑張ろうと思います。

若い頃の思い出は、信仰の深いところで私を支えてくれています。皆さんの健康と信仰の前進をここから願って、毎日池田教会のために祈っています。どうぞ、思い出します時には小さなシスター（修練期）のためにも、年寄りのシスターのためにもお祈りください。まだまだお話ししたいことは沢山ありますが、次の機会にしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

(本稿はシスター・ゾエ田島さんが口述されたのを広報委員会が書き起こしました。2葉の写真は妹さんから提供されました)

以上で「みんなの談話室」は終わり

## 表紙の絵について

「プリマヴェーラ(春)」や「ヴィーナスの誕生」の絵で有名な、サンドロ・ボッティチェリが描いた「聖母子と若き洗礼者聖ヨハネ」である。1468年ごろの作品。ボッティチェリは15世紀後半、初期ルネッサンスの時代に、メディチ家に認められ、その庇護を受けて、フィレンツェで聖画や神話をもとにした絵画を次々と描いた。本作品はルーブル美術館所蔵。2月は、イエス様がご自分の使命を果たれるため、ヨハネにより洗礼を受けて、ついに公生活へと踏み出されたことを黙想したい時である。

## 宝塚黙想の家から黙想会のお知らせ

### ■ 日帰り黙想会

2月27日(木) 10:00 ~ 15:30

指導: 山内十束 神父

2月28日(金) 10:00 ~ 15:30

指導: 山内十束 神父

### ■ 月例(週末)黙想会

2月はありません。



各黙想会、費用等のお問い合わせは「宝塚黙想の家」まで。 ☎0797(84)3111

## 年間カレンダーに追加・変更された行事予定

2/2、16、23(日) 13:00 ~ 14:30

信仰入門

2/6、13、20、27(木) 10:30 ~ 聖書百週間

2/14、28(金) 14:00 ~ 16:00

福音書を学ぶ会

2/23(日) ミサ後 臨時信徒総会

## 編集後記

1月号に続き、今号もフランシスコ教皇の訪日のさいの説教を巻頭言として再録した。東京ドームのミサで述べられた言葉である。フランシスコ教皇はとても大事なことを語っておられるので、折に触れ読み返し、私たちがどんな心構えで人生を歩んでいくべきか、再度噛みしめたいと願ったからだ。世界のさまざまな国でそらおそろしいほどの数の核兵器が保有され、またいっぽうでは、生活を便利にするために莫大なエネルギーが消費されている。日本には世界一便利なコンビニがあつて、日常生活で必要なものがほぼすべて、どんな時間に行っても買える。しかし、その裏には廃棄食品や苛酷な労働時間の問題などがひそんでいる。そんな社会で生きているわたしたちに、フランシスコ教皇は呼びかける。主に至る道は美しい、と。

ソフィー